

## 10) ツユクサ＝露草

ツユクサはツユクサ科の一年草で、日本各地の湿り気の多い路傍や小川の縁などに群生する。茎の下部は地面を這うように伸びて、先は立ち上がり、高さは20～50cmになる。葉は広披針形で先が尖り、長さは5～8cm、幅は1～2.5cmで、基部は鞘となって茎を抱く。7～9月頃の早朝、半円形の苞葉に包まれた花序に、青紫色の花をつける。花は一日花で、花弁は6枚、次々と開花するために長期間咲いているように見える。和名の由来は露をおびた草の意で、朝露の中から咲き出すためである。別称としてはツキクサ(月草)、ボウシバナ、ホタルグサ、アオバナ、ソメバナ、カキバナ、ウツシバナなどである。中でも「染め花」、「描き草」、「写し花」等、染色に関わる呼称が多い。ボウシバナは半円形の苞葉が帽子のように見えるためである。学名は『*Commelina communis*』で、属名はオランダの植物学者J.G.コムメリンに因む。一説によればオランダにはコムメリンという植物学者が3人いたが、一人だけ目立った業績がなかった。そこで博物学者のリンネは、3枚の花弁のうち1枚だけが目立たないツユクサの花に因んで、コムメリーナと命名したという。種小辞は普通のという意味である。イギリスでは『day flower』、中国では『鴨跖草』(オウセキソウ)である。

ツユクサは万葉時代までは、摺染めの染料として広く利用されていた。早朝採取した花の絞り汁を、直接、布や和紙に染み込ませた後、乾燥させたもので、簡便な染色方法であったため、種々に用いられていた。しかし水や紫外線に弱いツユクサ染は、中国から藍染めなどの最新技法が導入されると、間もなく廃れてしまった。ところが簡単に脱色できることが、逆に新たな利用を導き、染色の下絵を描くのに用いられるようになり、友禅染めや紋染めの下絵に利用された。このため滋賀県草津あたりでは、大規模な栽培も行なわれるようになり、ツユクサよりも花が大きいオオバナボウシバナが用いられ、効率化も図られた。江戸時代に伊勢や近江で売られていた『青花紙』は、こうした量産化により染められたものである。

文学の世界でツユクサは、「はかなさ」や「うつろいやすさ」の一つの象徴として詠まれることが多く、『万葉集』には次の一句も見える。

朝(アサ)咲き夕は消(ク)ぬる月草(ツキクサ)の 消ぬべき恋も我はするかも

この時代のはかなさは、あくまでも恋のはかなさであって、平安時代や鎌倉時代以降のような、人生のはかなさ的ないわゆる『無常観』を孕んだものではない。また『枕草子』では、「見るにことなることなきものの 文字に書いてことごとしきもの、いちご、つゆくさ、水ふぶき…」として、漢字で書くと仰々しいと述べている。

ツユクサの若葉は、茹でてお浸しや味噌和え、汁の実などにして食べることができる。漢方では全草を乾燥させたものを『鴨跖草』と呼び、煎じて解熱、下痢止め、喉の腫れに用いる。また浴湯料にすると、汗疹やかぶれにも効くといわれている。しかし今では染料や薬であることは忘れられ、観賞用として庭の片隅を彩っている。



ツユクサの花は、朝開いて午後には萎れてしまう。これを露に例えたものとも言う。イギリスでも「dayflower」で、咲いたその日に萎れてしまう花という意味である(さいたま市浦和区)。



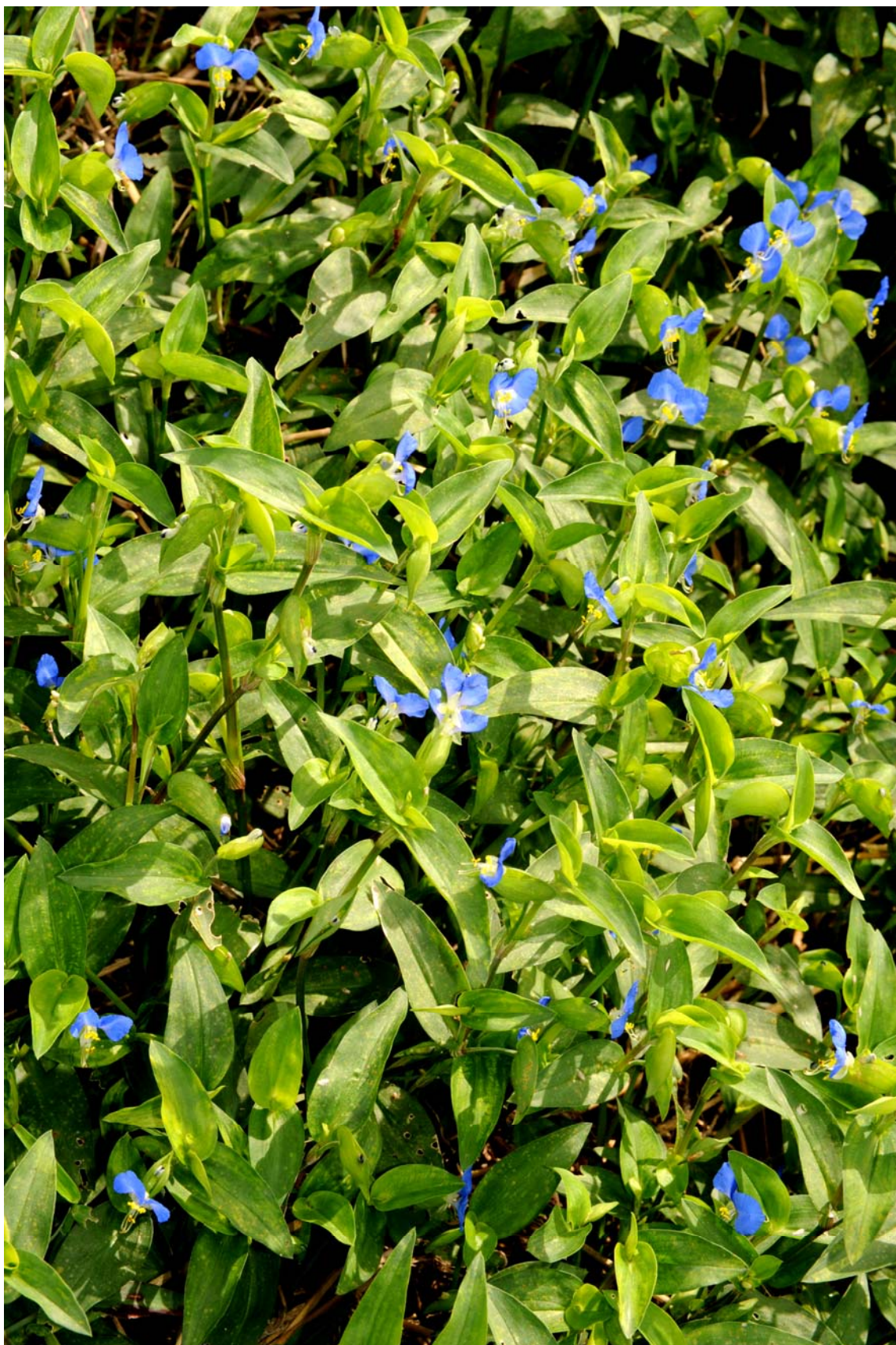
ツユクサの花、この花は3枚の花弁が同じ大きさで、このタイプは園芸種に多い(群馬県沼田市)。



これは園芸種が野生化したものと思われる。交配を繰り返したせいか種々の色があり、紫の濃いものや極端に淡いものなど様々である(さいたま市緑区)。



中にはこんな白いツユクサもあり、これは園芸品として栽培されている。3年ほど前、白のツユクサを買おうと思ったら、前にいた女性が先にも買ってしまった。そのことを話すと、その方は半分筆者に分けてくださった。今では株も増えてよく咲いている。



山野に自生するツユクサは秋 10 月ごろまで咲き続ける(さいたま市緑区)。



野生のツユクサの花、通常は写真のように、上の二つの花弁が大きく、下の花弁は小さくて目立たない。園芸種には葉に縦斑の入るものもある(栃木市花之江の郷)。



オオボウシバナ(大帽子花)。上の2枚の花弁が大きい(栃木市花之江の郷)。

[目次に戻る](#)